

大阪大学国際物理特別コース (IPC) 交流会報告

高部英明

2月24～26日と、南三陸被災地訪問、東北大学 G30 との交流、国際基督教大学(ICU)との交流を行った。簡単に報告したい。26日(火)10時過ぎに家に着き、翌朝6時50分、家を出て関空からルフトハンザでフランクフルトに着いた。12時間近いフライト。3時間待ちで、これから旧東ドイツのチェコ国境近くのドレスデンに向かう。現地時間は27日の午後5時。飛行機の中や待ち時間を利用して表記の報告を書いている。2013.2.27

感想、意見などは takabe@ile.osaka-u.ac.jp

1. 東北大学 G30 との交流

まず、まじめな報告からしておこう。25日午前中、南三陸町の被災地を訪ねた後、東北大学を午後3時～5時と訪ねた。友人を介して、工学研究科の小野教授が責任者の機械系の G30 大学院生との交流。今回は、学生同士は代表を決め、彼等独自の交流のプログラムを作らせた。したがって、教員同士の2時間に及ぶ意見交換の内容を思い出すままに書こう。

小野先生他、2名の先生が同席して下された。機械系は工学研究科の1/5の大きさと、全ての専攻で大学院留学生を受け入れている。学部は G30 のために英語コースを新設した。機械・航空などという特徴があるせいか、人気がある。今回の10月入学には学部で定員10名に対し、30名から既に問い合わせがあった。試験などは5月頃、行う。歩留まりもとても良い。問題は新設して2年、彼等は英語コースで講義など受けるため、日本人学生との交流機会が少ない。言語についてはやはり高校出たての若さか、日本語も直ぐマスターするそう。学部コースの英語名は「International Mechanical and Aerospace Engineering Undergraduate Course」(略称: IMAC-U)。分野はナノテク、量子工学、航空、交通、ロボット、環境など含む。アジアの学生達には魅力的な分野だし、日本の強い分野。大学院も機械系、材料系で沢山の専攻が受け入れている。

機械系4専攻長の1人に IMAC-U の責任が回る。9月まで2年間 G30 責任者をされていた先生も同席してくださった。私が「IPC リーダーを何時までも退任させて頂けないのです」というと、「工学系はトップダウンで人が動いてくれるので、機械系の全教員に IMAC の講義など担当してもらっています」と。機械系 G30 責任者が、「君は当然英語での講義は出来るよね」という。「No」とは言わせない(工学研究科に助教授までいた私にはよくわかる)。だから、オムニバス形式の講義なども含め、機械系の全教員が何らかの形で IMAC-U や大学院コース(IMAC-G)に関与している。すばらしい。私の共同研究者も「G30 自体のことは良く知りませんが、英語での講義はしています」と以前も言っていた。IPC

は反省しなければいけない。4月以降に大改革をしたい。

海外でのリクルートや知名度向上に努力している。また、質の保証のため、筆記試験も行っている。今年の大学院は11カ所で行ったが、10人近い先生達が実地での試験監督、面接に携わったそうだ。我々の方法を説明したら「そういうやり方もあるのか」と感心していた。将来的にはG30を続ける大学の全日本組織を作り、広報も試験監督なども協力し合って合理的に進める方向で合意できた。昨年の研修で九大のG30と交流した。その際も「G30実務者会議(仮)」を設立して協力体制を築きましよう」と合意している。「まず、日本の英語コースが定着するまでは国内は協力。戦う敵は米国、欧州。そして、英語コースが定着したら、競争しましょう」と私が提案。合意を得た。私が提唱した研究分野「実験室宇宙物理」の世界での研究展開戦略とおなじやり方だ。

文科省の補助金が無くなる26年度以降の方針を聞いた。阪大に状況は似ている。学部の共通教育の特任教員の雇用維持が大きい課題。東北大学の場合、阪大が不採択であった文科省の補助金事業「通称G30+」には採択されているそうだ。その後、3年間はG30+の予算の半分程度で教員の維持など図る。その先はまだ見えていない。

大野先生から「学部コースで中国の学生の学力評価、高校の成績で相対評価するのが難しい。何とかならないか」との悩み、質問。私は「中国は何でもランキングの国。必ず、『中国全中学ランキング』はあるはず。上海交通大学の学長が親友なので、彼に聞いてみます。わかると思います」と答えた。

実は、私は岡山の某高校のSuper Science High school (JST支援)の運営指導委員長を5年間拝命していたことがある。その時、校長から「中国上海の高校と交流をしたい。先生お願いできませんか」と尋ねられ、学長に相談した。そしたら「交通大には附属高校がある。超一流進学校だ。そこと交流すればいい」とのこと、3年ほど続けた。しかし、最初は学長秘書から依頼のあった付属校は、岡山のその高校の学力ランクまで調べ「学校のランクが低すぎる。釣り合わない、交流は辞退したい」と回答してきたそうだ。それを聞いた学長が怒り「俺の日本の親友からの依頼だ。辞退は許さない」と校長に直接電話し、実現したという経緯がある。中国の進学校は日本の全高校ランキングも持っている。

東北大学にはG30として農学研究科のコースもある。しかし、G30には農学研究科は反対で、結果として、関連一研究所でコースを作ることになったそうだ。日本の大学はやはり保守的、変化を好まない、が大勢のようだ。

話しは飛ぶが、東大で今期、私の友人がG30全体の責任者になった。彼と話していても悲観論になる。「日本は黒船が来るか、戦争に負けないと変わらない。大学の国際化もTPP締結で、米国のハーバードなど4兆円も基金を持つ大学が『ハーバード大学日本校』など設立し、日本の秀才がハーバードを目指す様になり、始めて「これではいかん。改革だ」となるのだろう」と話している。

日本は悲しいかな、自分で自分を変えることが出来ない。政治しかり、霞ヶ

関しかり、かつて世界に名を馳せた大企業しかり。そして国立大学しかり。結局、第3の黒船が来ない限り変わらないのではないか、という結論に行き着いてしまう。意識ある大学人がどこまでこの悲観論をくつがえせるかが問われている。

2. 国際基督教大学(ICU)との交流

26日(火)の午後、東京駅から中央線・三鷹駅で降り、ICUに向い、ICUでの国際化の取り組みを議論(教員)、交流(院生)を行った。正直に書くと、東京でも理系の大学院のG30コースとの交流を考えていた。出来れば私学と。昨年交流した別府の立命館アジア太平洋大学で、学生課の事務の方々の能力に感心したからだ。設立にも関与し、10年以上勤め、大学の変遷も良く知り、かつ、すばらしい英語で大学を紹介してくれ、感心した。5人くらいの事務の方がいて「あなた方は、事務職員なの?」と聞くと、「そうです。でも、学内ではEnglish Native Officerと呼ばれています」と聞いて納得した。帰国子女などが事務職を担当している。私学故の国際化への適材の投入という自由度は、3年ごとに事務の方が移籍していく国立大学にはまねできない。国立はこの事務制度を変えない限り、国際化は教員に大きな負担を要求する。(阪大G30事務責任者の向井課長は制度改革に前向きで、大いに今後を期待している)

早稲田大学に理系で大学院コースがあるので、友人に責任者とコンタクトして頂いた。ところが、早稲田は以前から進めていた国際コースの中にG30の大学院生も所属させており、G30という単位での活動がないという。仕方がないので他も調べたが、結局、東大くらいしか無かった。そこで、先ほどの友人に電話で相談したら、やはり、東大もG30という単位での活動がないと言う。どうしようか、と考えていた時、別の友人を思いついた。北原和夫・元物理学会会長。彼が会長になった時、私は日本物理学会の国際化を推進してほしいと、彼に依頼され2002年に国際交流担当理事に指名された。理事は2期4年務めた。北原さんは当時ICU教授。ICUが国際的に活躍する人材を育成することで評価が高いことなど聞いたり、実際に学生と話して感心したりした経験がある。そこで、北原さんに趣旨を説明し、ICUと交流することにした。

これが、かなり成果があった。ICUは教養学部だけの一学年600人の大学。西尾学部長が対応してくださり、あと、鈴木、毛利、スティール先生と2名の事務員が2時間弱、対談してくださった。G30に採択された大学は、留学生の数を10年間で倍増。外国籍の教員の割合を10%に増やと、文科省と約束させられている。阪大はG30開始時点で後者は3%もない。これを7%に引き上げると約束した。教員数は2500人程度だから差の4%は100人である。年間10人程度増やすのは大変。留学生の件も、「質を維持しながら倍増」だから、いかに大変かおわかり頂けよう。ICUの留学生は8%だそうだが、教員は30%が外国籍。スティール先生は勤続30年で、なんと「日本史」を教えている(びっくり)。彼曰く、「はじめの頃、日本人は既に習っているから、教え方を工夫しなければと考えていたが、結局、新入生の日本史の知識はゼロに近く、留学生と差がな

いことに気付いた。同じように教えている」(この点は5頁下の「ICU 補足」参照)。

ICU には数は少ないが海外学生や帰国子女などが受験しやすい秋入学の制度も完備。当然、秋卒業となる。年2回卒業式をする。私はICUに入学する高校生は意識が高いのだろう、と以前から思っていた。しかし、そうではないようだ。ここが、重要な点だ。ICUの大学理念はChristianity(基督教精神)にある。私は30年前にミュンヘンに住んでいた時、大家さん夫婦(Berga & Eahard Fischer)が色々な教会に連れて行ってくださった。熱心なカソリック教徒である。そこには日本の仏教などの宗教とは全く異質の精神を見出した。Christianityは朝、目覚めた時から神を意識し、夜寝るまで、自分の行動規範は神の行動規範に従ったか自問する事で一日を終える。宗教が人間形成・倫理・愛(博愛)という社会生活の規範を与えていることを感じた。日本人の宗教と異なり、倫理・道徳・人間性を宗教は教えてくれる。

宗教については看過しがたい現実がある。昨年8月、IPCの院生達と海外志向の阪大学生20名程度の自由歓談「IPC English Tea Time」という行事を行った。IPCの留学生が日本人学生と話す機会が少ないと言うので、ある種、お見合いの機会を作った。「さて、始めましょう。では、IPCの学生から何か質問ありますか」と聞いた。Tobiが「貴方達の宗教について説明してください」と質問した。すると、日本人は全員黙ってしまい、答えは「まあ、仏教かな?説明と言われても、、、」と会話が全然成り立たない。ドイツへの機中、イタリア生活30年という元ANAスッチーさんが横で、この話しをした。すると、彼女も「よく宗教について質問される。宗教がわかると相手の人格がだいたい掴めるからかな」と。夏の時は、私がドイツで理解したChristianityについて補足説明したが、それでも会話が進行しなかった。

しつこいようだが、宗教についてももう一例。ロシア人の科学者で友人のBaskoが3ヶ月、研究センターに滞在した。彼の帰国が明日という時、昼食をしながら雑談をしていた。彼に日本の印象など聞いていたら、彼曰く「3ヶ月いたが、日本の宗教が何なのかがわからなかった」という。「帝政ロシアでは皇帝は武力で皆を従えた。しかし、これは物理的な支配であり、精神的支配には宗教がいる。皇帝には、イスラム教でもカトリックでも何でも良かった。彼は近くのギリシャ正教を選んで、それをロシア正教として利用した。日本は武士の時代、どの様にして民の心を支配したんだ」と質問してきた。「それについてお前が理解できるように歴史を紐解いて説明するには3時間かかる。昼飯時間では無理だ。今度来た時説明するよ」と概略だけ説明して別れたことがある。

ICUのパンフに3つの大学運営の理念が「3つの使命」として記されている。冒頭だけを引用すると。

1. 学問への使命: ICUは、真理を探究し、自由の内実をさらに豊かにすることを目指して献学された。
2. キリスト教への使命: ICUは、キリスト教精神によって立つ大学であり、

その使命は、宗教も含め、人間存在のあらゆる問題を探求し、考察を深めることにある。

3. 国際性への使命： 献学の根本理念は、国家の枠にとらわれない立場を目指す大学。様々な国籍や文化的背景を持つ人々が共に学び、働く、共同生活の場。多彩な教育観がカリキュラムに反映され、構成員が独立した人間としての人格的出会いを経験する。

実は、理念をよく読んで感心したのは、日本の大学（特に国立大学）が「理念無き大学」として漂流を始めている危機感があったからだ。今、大学の各部署の「ミッションの再定義」を文科省から求められ、私の部署でも議論を重ねた。しかし、皆の発言に「理念とはどうあるべきか」という哲学的出発点が頭の中になく。だから、極めて即物的な言葉を並べてしまう。ルカと「日本は高校生に哲学を学ばせて、理念など抽象的だが奥の深い概念の理解能力や議論の経験を学ばせるべきだ」と話した。全ての弊害は暗記を前提とした大学入試にある。大学人が何故そこに気付かないのか、寂しい限りである。

鈴木先生がよく話してくれた。ICUでは受験生全員を賓客として招待し、ICUの教育理念の説明をする。そして、縁があり入学できた生徒達の個々人の成長に責任を持つ。だから、講義は常に学生との対話形式だ。最初は、発言することに戸惑ったり、対話形式自体が飲めこめない生徒達も、学年ごとに成長していく。そのような皆とのやりとりはコミュニケーション能力の育成であり、口に出して自分の意見を述べることで、高校まで意識になかった「自己形成」を自覚するようになる。彼は数学の先生。4月から文系の学生達に数学を英語で教えることにしたそう（これは間違い。下の鈴木先生のコメント「ICU 補足」を読んでください）。日本語でもわからない現代数学の魅力や論理的思考法を英語で文系の学生に「人生に必要な教養の一つ」として学習してもらおう。すばらしい試みである。是非、学期の終わりに成果の程を聞いてみたい。

ルカと後で話した。大阪大学の理念。聞いた事無いな。阪大の「地域に生き、世界に伸びる」は抽象的すぎて理念とは言えない（キャッチ・コピーだ）。阪大の教育に対する理念はあるのかな。あるとすれば、先生方はその理念を振り返りながら、教育に携わっているのだろうか（知らない私は教授失格ものだ）。理念がはっきりしていないから教え方は各教員任せになる。ICUでは Faculty development（教育・講義などの仕方を教員に訓練する）も盛んに行っているそう。イギリスでは大学の教員になる資格として教育法・講義法などの訓練を受け、基準を超えないと教育資格が与えられない様になったと最近聞いた。大いに、耳の痛い話しである。これも、黒船待ちだろうか？

ICUのデータ帳も頂いた。これを見ると、交換留学で世界中の大学と協定を結び学生交流をしていることがわかる。私学はこのような制度を大学の魅力としており、関西でも同志社（姪が一年、米国に留学）や関学など盛んなようだ。

ICU 補足（鈴木先生より丁寧で重要なコメントを頂いた。転載）

「彼は数学の先生。4月から文系の学生達に数学を英語で教えることにしたそう。」とありますが、ICUの用語では、教授言語区画で、J/Eというカテゴリーで教えます。主たる教授言語は日本語です。ただ、配布物や、スライドなどは、殆ど英語になると思います。

言語カテゴリーは、ICUでは曖昧な部分が多いのですが、それは、学生の多様は言語・文化背景によっています。配慮するということでもあります。留学生以外で、たとえば、四月に入学してくる学生にも、TOEFL 670点（満点）が何人もいます。通常の会話は日本語で全く問題無い学生でも、学校教育を日本語で受けたことがない学生も一定の割合おり、自然科学では、数学・物理・化学・生物いずれも、教科書を英語にするなどの、配慮をしています。

教授言語で単純にわかることは、ICUではあまり適切ではないと思っています。手元のデータでは、英語・日本語の語学科目と体育以外では、

J: 55%, J/E 15%, E/J 4%, E 19%, OTH 7%

J/E, E/Jは最初の方が主たる教授言語、OTHは日本語と英語以外ですが、他の大学での第二外国語、ICUでは世界の言語の科目です。

Steele先生の発言の部分で、「結局、新入生の日本史の知識はゼロに近い。留学生と差がないことに気付いた」の部分。わたしも不思議に思ったので、先生とお話しした最後にSteele先生に質問しました。すると「大学で歴史学を学ぶ上の知識としては、差がないという意味だ」と言っていました。曖昧ですが、日本の高校での知識詰め込みでの、様々な歴史の知識は歴史学を学ぶにはあまり役に立たないという主旨の発言だったと思います。

お話ししたように、多様な言語・教育・文化背景の学生を受け入れ、巣立っていく先も、多種多様です。これは、見方によれば、日本の他の大学でもそうなっていると思います。言語という枠だけで考えるとICUとは違うかも知れませんが。一様だと仮定しているところに（そう仮定できれば楽ですが）、問題があるのかも知れません。いずれにしても、社会のどこにおかれても、そこで自分で考えながら生きて行く「責任ある地球市民」を育む教育、すぐには役に立たないかも知れないけれど一生価値のあるものを学んでいってもらう教育をICUはしようとしていると考えています。学部教育においても、ゼミや、研究室での、専門教育を中心とする教育とは、一線を画していると思います。しかしこのようビジョンは、18歳人口と考えると、75%程度が何らかの教育機関に属し、50%が4年生大学に入学する日本において、ある普遍的価値も含んでいると思いますが、どうでしょうか。長々と書いてしまいました。今後ともよろしくお願い致します。

鈴木寛

3. こぼれ話（割愛）

4. こぼれた話 (未完)

